芸術の館
兵庫県立美術館
HYOGO PREFECTURAL MUSEUM OF ART
〒651-0073 神戸市中央区脇浜海岸通1-1-1
Phone:078-262-0901
http://www.artm.pref.hyogo.jp

QUARTERLY REPORT
アートランブル
VOL.27
2010年6月20日発行

ARTRAMBLE

学芸員の視点 ❷❸
「没後10年　小倉遊亀展」をふり返って —— 飯尾由貴子
ショート・エッセイ ❹
「絵画の5つの部屋」を企画して —— 出原　均
トピックス ❺
小倉遊亀展関連イベント～講演会と朗読会
中山岩太展関連事業を実施しました。
レンピッカ展記者説明会
美術館の周縁 ❻
私の抱負 —— 蓑　豊

コレクションから

金属と樹脂と電化製品などの廃棄物を組み合わせて作った本作は、1989（平成元）年に神戸市北区の総合福祉ゾーン「しあわせの村」で開催された「神戸具象彫刻大賞’89」展で神戸市制100周年記念賞を受賞した作品です。

オートバイの後ろ半分が人間の下半身になっているというこのユニークな造形について、作者は「メカに人間が使われる時代、機械にエロチシズムを持たせ、人間と共存できないものかと、考えついた」（『読売新聞』1989年9月12日）と説明しています。「共存」という言葉が皮肉めいて聞こえるこの作品は、卑近でエロチックな表現を用いて現代社会の問題を風刺・告発する東山のスタイルをよく示しています。

大阪で生まれた東山嘉事は、疎開先の兵庫県三田市で美術活動を始めました。1960（昭和35）年に東京に移り住むと、「タム・タム芸術集団」と名乗る前衛的な芸術家グループに所属して、漫画や映像作品などを発表しました。1968（昭和43）年には東京を離れて、三田市を拠点に絵画、陶芸、石彫モニュメント、木彫、ジャンク・アート、オブジェ、パフォーマンスなど幅広い芸術活動を展開しました。

時にはグロテスクに、時にはほのぼのとしたユーモラスなタッチで表現された多彩な作品には、一貫して社会に対する批判的な視線、時代への警鐘が込められています。

（服部　正／当館学芸員）

東山嘉事（ひがしやまかじ）（1934～2006）
《共存の哲学》
1989（平成元）年
鉄・ミクストメディア
130×210×85cm
平成21年度東山とし子氏寄贈

QUARTERLY REPORT
ART RAMBLE
VOL.27
2010年6月20日号

没後10年　小倉遊亀展をふり返って

飯尾由貴子

当館では、昨年度最後の特別展として「没後10年　小倉遊亀展」を開催した（2010年2月18日～4月4日）。企画から展覧会実施までの経過と、会期中に感じたもろもろのことを、以下担当者として述べようと思う。

滋賀県立近代美術館所蔵の小倉遊亀の作品を中心に小倉遊亀展を開催してはどうか、という話が持ち上がったのは、2008年6月のことであった。1984年8月に開館した滋賀県立近代美術館は、開館に先立つ1980年、大津市出身の小倉遊亀から院展出品作を中心とする20点もの作品の寄贈を受けた。これが核となり、以後継続的に小倉遊亀の作品収集が行われ、現在では本画49点、下絵5点、資料3点[1]を含む優れたコレクションを有している。このコレクションは展示替えを行いながら常時「小倉遊亀コーナー」で公開され、同館の展示の目玉の一つとなっている。

さて、本展立案の背景には、美術館同士での事業連携、相互協力という意図があった。美術館をめぐる情勢は相変わらず厳しく、存立の是非が絶えず問われている昨今、単一館では限界のある事業展開を打ち破る一つの方策として、他地域の美術館のもつ文化的資源を相互に活用し、それぞれの地域へ還元していくこと、すなわち美術館同士の連携・協力の可能性を探ろうということになったのである。それを試みる上で、収蔵品や展覧会構成の観点から、ほぼ同等の構成をもち、かつ密に連携の取りうる館として滋賀県立近代美術館の名が挙がった。結論から言えば2008年12月5日、滋賀県立近代美術館と当館との間で、「相互協力に関する基本協定」が正式に締結され、①展覧会の共同開催及び共同研究、②所蔵品の相互活動、③学芸員の交流、④ボランティアの交流、という4つの分野での協力が確認された。協定締結を前提に、それまでの約半年間、滋賀県立近代美術館と協力内容や具体的な出品作品についての協議が重ねられ、「没後10年　小倉遊亀展」はこの基本協定締結後の事業の第一弾として位置づけられることになった。

また、本展が宇都宮美術館との共催となったことは偶然の「幸運」による。宇都宮美術館は、当館で小倉展の企画が持ち上がる直前、2010年度の開催に向け小倉遊亀展を単独で計画していた。開催希望時期もほぼ重なっていたこともあり、単独で開催するより共同開催という形にしたほうが内容も充実したものになるであろうし、出品交渉もスムーズに行うことができるだろうということになり、二館での開催が決まったのである。

展覧会に向けての準備は、同年8月、小倉遊亀遺族宅への訪問から始まった。北鎌倉駅からほど近い小倉家を訪問、開催についての承諾をいただき、本格的な準備がスタートすることとなった。宇都宮と兵庫とで、作品リストを検討し、それに沿って出品交渉が秋から始められた。周知のとおり、小倉遊亀は没後10年を経た現在でも高い人気を誇る画家であり、生前にも広くその名は知られ数多くの展覧会が開催されてきた。美術館でも数年おきに展覧会が開催されており、画廊での企画展やデパートの美術展などを含めればかなりその頻度は高い。また個展だけでなくテーマ展の中で紹介される場合も少なくなく、作品を「確保」することの難しい画家である。また小倉作品を熟知している往年の小倉ファンも多く、大規模な回顧展を開催する側としては彼らの期待にも応えてゆかねばならない。滋賀県立近代美術館からは、協力関係ということである程度まとまって出品いただくことは前提となっていたにせよ、その他の作品については当然ながら一から交渉せねばならず、この時期に出品交渉を開始するのは決して早くはなかった。特に代表作については、できる限り出品が叶うよう、担当者揃って交渉に出向き、作品によっては何度も交渉を重ねたものもあった。小倉作品の場合、回顧展等が相次いで開催されるため出品依頼の件数が多く、かつ日本画ということで長期の展示は難しいという二つの条件が重なり、出品交渉は決して順調とは言えなかった。ただ最終的には、展覧会の趣旨をご理解いただき、いくつかの条件をつけざるを得ないけれども最大限努力して下さった所蔵家、所蔵館のご協力を得ることができたことは有難いことであった。

滋賀県立近代美術館に設けられている「小倉遊亀コーナー」（写真提供：滋賀県立近代美術館）

学芸員の視点

「没後10年　小倉遊亀展」会場風景

本展の開催にあたって、最も難しい課題であったのが、展覧会をどのようにみせるか、ということであった。繰り返すが、小倉遊亀はこれまで多くの回顧展が開催されてきた。作品についても主要な作品については過去いずれかの展覧会には出品され、今回初出品と銘打つ作品があるわけではない。没後10年の回顧展ということで少々気合いが入りすぎたのかもしれないが、展覧会構成についてはかなり長い時間をかけて担当者間で話し合った。とはいえ、一作家の業績を回顧する手法としては、オーソドックスに初期から晩年までを通観するというのが最もよく、また見る側もそれを期待していると思われた。そこで今回は初期から晩年までという枠組みは崩さず、ジャンル毎にその展開を追うということになった。

小倉遊亀の描いたジャンルは人物画と静物画にほぼ集約される。人物画は《童女入浴》（1925年、滋賀県立近代美術館蔵（兵庫会場には出品されず））にはじまる展開を、静物画は《ゼラニウム》（大正期、滋賀県立近代美術館蔵）からの展開をそれぞれ辿った。細密描写に始まる作品から、子どもや身近な人物を生き生きと描いた作品、そして次第に日本美術院の作家の影響を受けて明快で簡潔な構成による作品へと移り、戦後は洋画の表現などを果敢に取り入れながら独自の世界を拓いていく過程が、ジャンル別に展示することによってより鮮明に示されたのではないかと思う。人物画の展開と静物画の展開はモチーフは異なるが、当然ながら同じ軌跡を辿っている。第2章で人物画、第3章で静物画を展示したのだが、第2章で確認されたことが第3章の静物画でも同様に確認されることによって小倉遊亀の時代ごとの歩みを明らかにとらえることができた。

今回はまた、第4章として本制作の日本画以外の作品を展示するコーナーを設けた。谷崎潤一郎の小説《少将滋幹の母》の新聞連載当時の挿絵、《細雪》の河出書房新社刊の単行本のための挿絵（いずれも滋賀県立近代美術館蔵）、俳句雑誌『ホトトギス』の表紙絵原画、その他雑誌の表紙絵、本制作の大下絵等々である。当館の近隣には芦屋市谷崎潤一郎記念館、虚子記念文学館（芦屋市）があり、このたび谷崎潤一郎記念館には、本展の記念イベントとして企画した「朗読会」で協力を、また虚子記念文学館からは『ホトトギス』の表紙絵原画をご出品いただき、ゆるやかな協力・連携関係を結ぶことができたのは収穫であったと思う。

最後に作品について一言述べておきたい。展示の際に感じたことは、小倉遊亀の作品は小品であっても当館の「壁」や「空間」に負けていなかったということだ。グレーがかかったやや冷たい印象の壁と7.2mの天井高をもつ当館の空間は、紙や絹を支持体とする繊細な日本画にはどちらかといえば不向きである。それが小倉遊亀の場合は、殊に戦後の作品においては大画面の人物画だけでなく、梅や椿を描いた静物画の小品でさえ、確固とした存在感を放っていた。確かに戦後の日本画は粗い粒子の絵の具を塗り重ね、洋画に匹敵する強い画面作りを目指してきた。遊亀も絵具に砂のようなものを混ぜてざらざらした質感を追究したり、コラージュの技法を取り入れたりしながら様々な表現を試みている。しかし技法上の理由だけでなく、最晩年の作品であってさえ、ぱっと眼を引く存在感と華やかさ、これは作家自身の生来の気質に加え、ひたすら絵を追求しようとする一途さ、誠実さ、そして精神的な強さに因るものではなかろうか。遊亀は44歳の時、つぎのような言葉を述べている。「自分の性質から、好きなのは温かみのある色、朱だの橙黄だのは明るくて、しかも深みがあっていい。たとへ寒色のものを扱っても、そこに清々しさや、明るさや、潤ひなど温さに通ふものを見出してゆきたいやうな心地がする。季節でも寒い時よりは暖かな、そして、いっそ夏などのカラリとした時がいい。代赭色の地面にカッと陽が照りつける。さうした陽光の中で、青々と燃え立つている木々や、草葉など、生の営みの程を盡くしている自然のありさまは限りなく美しい。活力が漲っている・・・さうした中にある饒けさと清々しさには目がさめるやうな想いがする。何はあれ、自分の力のありったけを盡したい。絵の上でのみならず、嘘をいはず、いひわけをせず、へこたれず、生（き）のままにやってゆくこと。（中略）画家の「絵描き臭」はこまりもの、何時までも素人としての初心（うぶ）さ、新鮮さで生きてゆきたいと思ふ」[2]この確信に満ちた言葉に表れているように、生気の漲る明るさを愛し、常に変化しつづけようとする姿勢こそが作品に力をあたえてきたのだと思われる。

本展は滋賀県立近代美術館との幸運な出会いなくしては実現できなかった。作品の出品だけでなく、図録のテキストその他様々な局面において惜しみないご協力とご理解をいただいた同館に対し、改めて感謝の意を表するとともに、今後両館が相互理解と協力のもと、それぞれの特色を生かした良い展覧会、事業を開催していくことを心から望む。

（いいお・ゆきこ／当館学芸員）

注

（1）このデータは『滋賀県立近代美術館名品選／小倉遊亀』（2010年3月31日発行）による。

（2）小倉遊亀「生のままに」『塔影』第15巻第5号　1939年5月

QUARTERLY REPORT
ART RAMBLE
VOL.27
2010年6月20日号

「絵画の5つの部屋」を企画して

出原　均

ショート・エッセイ

今年度のコレクションⅠは、現代絵画を特集展示した。当館の近代絵画の主要なものがこの会期中、特別展に出品されており、近代絵画をまとまって展示できないので、その機会を逆に活かして、現代美術に焦点を当てたコレクション展を試みたわけである。

企画にあたり、観客の方が現代美術に興味を持っていただくような、いくつかのテーマを設定した。現代美術のまとまった収蔵品群である「山村コレクション」を核とし、それに他の所蔵品を組み合わあわせて、現代美術の多様な面をできるかぎり引き出すような構成を心懸けた。作品同士を比較するやり方もいくつか採用している。

5つの章を、企画者の側から簡単に説明してみたい。

第1章の「近代と現代をつなぐもの」は、構図、手法などで近代絵画と現代絵画のつながる点を紹介した。現代絵画をそれ以前と区別する考え方もあるが、ここではむしろその連続性を捉え、それによって現代絵画への導入部にしようとしたのである。

第2章でいう「絵画の境界」には、絵の中の、中心的な形とその周りとの境、および絵そのものと周りの壁との境があるが、後者の比重が増した1960年代の一傾向を紹介した。画面の中心だけでなく、このような境にも眼差しを向けてもらい、絵に対する接し方の多様さを感じてもらいたかったからである。

第3章は、「形と空間」と題して、形の造形に主眼を置いた作品と、画面にさまざまな事物を描いて錯綜した空間を構成する作品とに分け、対比させてみた。たとえば、横尾忠則の作品は、空間作りにおいてその特徴が出ていることがこの枠組みで理解されるのではないだろうか。

第4章「足は幾百の表情を生む」には、白髪一雄のフット・ペインティングの代表作を展示した。ここでは、白髪の作品のダイナミックさだけでなく、絵画としての多様な試みと魅力を引き出すように努めた。

第5章の「画面に見えるものと見えないもの」には、写実的な作品はわずかしか出品していない。ここでは画面からイメージされるもの、想像されるものなど、観客のほうが絵に補うことを重視したためである。同じ文字だけの作品でも、高松次郎の《日本語の文字》と平田洋一の《コレイガイノスベテ》では、観客の想像力の働かせ方において全く逆であることは私自身興味深かった。高松は想像力を抑え、平田は羽ばたかせる。

5章のうち、第1章、第2章、第4章は手法など形式的な面、第3章、第5章は内容の面を扱っている。それらのテーマの中で問いかけ、見直しを行うことを試みた。たとえば、第1章では、過去のものからの断絶を強調する進歩主義的な考えであり、そうした考えは、第4章で展示した白髪一雄のフット・ペインティングの新しさを強調する立場にも反響している。そのような見方を少し再考してみたかった。第2章の意図は、上で触れた。第3章では、平面性に応じた作品を評価する立場からも、その逆の立場からも自由な視点から見てもらいたいという意図があった。

第5章は、いま私が最も興味のあるテーマである。私たちはどのように絵を見、どのように認識しているのか。認知科学や認知言語学を少し参照しながら考えているところで、いまだ途中の段階ではあるが、コレクションの中で探ってみた。

最後に展示について。体育館のような当館の大展示室を、可動式の展示壁を出さずにまるまる使ってみたいという日頃の思いを第4章で実現させた。ダイナミックな白髪のフット・ペインティングならばそれも可能だろう、と。フット・ペインティングは床の上で制作されるので、床への観客の視線を引き出すために、そこに文字を配する試みも加えている。第5章の展示室でも可動式の壁を取っ払った。そうすると、この部屋は、天井高が低い割に横幅があるので、展示壁が迫る感じのない、落ち着いた雰囲気になる。壁が灰色であることもその効果を高めている。ここに、観客自身の内なるものを問いかけるようなテーマを設けるのがふさわしいと思ったのである。果たして、観客の方はどのように感じただろうか?

（でばら・ひとし／当館学芸員）

2010年度コレクション展Ⅰ　絵画の5つの部屋（会期:2010年3月27日ー7月4日）

第4章の展示風景

第5章の展示風景

トピックス

小倉遊亀展関連イベント ～講演会と朗読会

はじめに開会式にご出席下さった作家の田辺聖子氏について記しておきます。田辺氏は、『田辺聖子全集』（全24巻、集英社、2004年）の装幀に小倉遊亀の作品を選ばれるなど、遊亀の作品に大きな共感を寄せられています。伊丹市ご在住という縁もあり、開会式でテープカットをしていただきました。田辺氏の作品はいずれも庶民の日常の生活を平明な文体で描写したものですが、その眼差しは鋭く、洞察力に溢れ、フィクションでありながら非常にリアリティのある世界が描かれています。この目線、対象を見つめる鋭さと厳しさ、そして平明でありながら的確な表現はそのまま遊亀の作品に通じるようにも思われます。

講演会では滋賀県立近代美術館学芸課長の高梨純次氏に、小倉遊亀の人と作品についてお話しいただきました。高梨氏は開設準備室の時代より同館に勤務され、開館記念展の「小倉遊亀展」にも携わるなど、小倉遊亀作品の収集と公開に尽力してこられました。画家の人生と作品を詳細に追ったお話に、聴講の方々は熱心に聞き入っておられました。

朗読会は、芦屋市谷崎潤一郎記念館事務局長、篠原嘉彦氏による解説と、朗読グループRSTのメンバー8名の方による朗読とで構成しました。遊亀が挿絵を描いた谷崎潤一郎の小説『少将滋幹の母』とともに、芥川龍之介『蜜柑』、高村光太郎『レモン哀歌』などを交え、「文学における色彩」という隠されたテーマのもとに構成された朗読会、構成の妙と情感溢れる朗読は筆者にとっても大変印象深いイベントでした。

（飯尾由貴子／当館学芸員）

高梨純次氏による講演会

朗読会

中山岩太展関連事業を実施しました。

“写真家　中山岩太「私は美しいものが好きだ。」”展の関連事業として、連続レクチャー「“レトロ・モダン　神戸”を語る」を実施しました。これは展覧会のうち第2部の「レトロ・モダン　神戸ー中山岩太たちが遺した戦前の神戸」にちなみ、戦前の六大都市のひとつとして数えられ、当時めざましい発展を遂げた「国際港都」神戸を、さまざまな角度から捉え検証しようとする試みで、3回に分けて行いました。

第1回目は「戦前のアマチュア映像作家が捉えた神戸」。展覧会にも出品された桝田和三郎氏による映像を手がかりに、戦前に小型撮影機などがどのように流通され、一般市民にどのように普及していったかなどを、映像研究家の森下明彦氏が詳細に解説されました。

第2回目は「変貌する都市風景1930’s～50’s－昭和期神戸の光と影」。建築史家で神戸大学大学院准教授の梅宮弘光氏が、同大学に残されていた、1936（昭和11）年当時撮影の膨大な量の神戸市街の空中写真から約40枚を抽出し、当時の神戸の街並みが、中山たちによって作品化された水平の視線とは異なる視点から鮮明に浮彫にされる様子を解説されました。

第3回目は「懐かしの絵葉書～モダン神戸の原像」。現役の高等学校教諭の絵葉書研究家で今回の展覧会にも多数の資料をご出品いただいた石戸信也氏が、明治以降の絵葉書の製作・頒布目的やそこにあらわされた神戸のさまざまな表情の解説とあわせて、さらには当時のSP盤による歌謡曲なども提供され、レトロでモダンな戦前の神戸の様子を目から耳から楽しませてくださいました。

その他にも毎週日曜日のミュージアム・ボランティアによる解説会の実施、さらに「こどものイベント」では、ピンホールカメラを自作し、実際に撮影・現像を経験する機会を提供するなど、あらゆる角度から展覧会を充実させることができました。

（相良周作／当館学芸員）

（左から）解説される森下明彦氏、梅宮弘光氏、石戸信也氏

レンピッカ展記者説明会

5月18日（火）よりギャラリーにて「美しき挑発　レンピッカ展」を開催しています。開幕に先立つ5月17日（月）に、新聞や雑誌、テレビなどの記者の皆様をお招きして説明会を開催しました。説明会では、レンピッカ研究の第一人者のアラン・ブロンデル氏が、作品を前にタマラ・ド・レンピッカの作品の特徴や人柄などを、約1時間にわたってお話しくださいました。

ブロンデル氏は、1960年代の後半に画商として活動を始め、当時完全に忘れられていたレンピッカの作品を古い雑誌の図版で見つけて関心を持ったそうです。そして、電話帳でレンピッカの名前を見つけて連絡を取り、本人に会って約5年に及ぶ交渉の末に彼女の回顧展を実現しました。この展覧会がきっかけとなって、レンピッカの再評価が始まり、現在の高い人気につながっています。レンピッカを世に出した当事者でありながらその語り口は謙虚で、豊富な経験と知識に裏打ちされたお話しは示唆に富むものでした。長時間のギャラリー・トークにもかかわらず、集った記者の皆様が最後まで熱心にメモを取る様子が印象的でした。

（服部　正／当館学芸員）

ギャラリー・トークの様子
（中央がブロンデル氏、左は通訳の花岡敬造氏、右筆者）

●── 編集後記

●本ページでご案内しておりますように、現在当館ではギャラリー棟でも企画展を開催しています。企画展示室と常設展示室での展覧会を合わせますと、同時に3つの展覧会を開催している時期もあります。時間と体力に余裕をもってご来館いただけましたら幸いです。
●6ページでご紹介しましたように、本年度より蓑豊新館長が就任しました。これから新館長のカラーが表れてくると思いますので、当館の活動にご注目ください。
●年度が変わり、前任の岡本学芸員より本誌編集を引き継ぎました。第6号まで編集を担当していたので、本欄には5年ぶりの復帰となります。改めましてどうぞよろしくお願いいたします。（服部）

兵庫県立美術館
quarterly report
ART RAMBLE
VOL.27

2010年6月20日発行
編集・発行:兵庫県立美術館
〒651-0073
神戸市中央区脇浜海岸通1-1-1
印刷:（株）サンメディア

私の抱負

蓑　豊

美術館の周縁

前号の中原佑介前館長のインタビューに引き続き、本号では4月に就任した新館長のメッセージを掲載する。

私はアメリカとカナダで26年間美術館にかかわり、生活していました。その後日本に帰り、12年間美術館の仕事に携わったのち、この春まで3年間アメリカに戻り、ニューヨークのオークション会社に勤務しました。計約30年間北米で過ごして、まず感じることは、日本の美術館はアメリカの美術館と比べると、楽しさが足りないと言いますか、何か無理やり美術館に居させられるような感じがしてならない、ということです。大事な時間を費やして美術館まで来た以上は、素晴らしい作品に接することも大事ですけれども、楽しむことも大事だと思っています。

私は、21世紀に世界で生きていける子どもたちを育むためには、美術や音楽などの芸術に接する機会を持たせることが大事だと思っています。本物の芸術に触れる機会を提供し、子どもの感性を引き出し、その成長に大きく寄与する場所の一つが、私がこれまでずっと携わってきた、美術館です。美術は、観る者の感覚に直接メッセージを送るものであり、また、作品を観ることをとおして、考えるきっかけを与えてくれるものでもあります。感性は、本物を見て、感動したり感じたるすることによって培われます。心に響く経験は、人生のあらゆる側面において、発想の源になったり、動力になったり、支えになったり、意識や勇気を与えてくれたりと、生きていく上での可能性を大きく広げ、生きる力を与えてくれるのです。どんな職業につくにあたっても、感性は必要であり、豊かな感性があることによって、創造力が生まれてくるのです。

アメリカはインディアナ州のコロンバスでは、ディーゼルエンジンを作るカミンズ社の社長が、自らの街の小中高校や図書館、郵便局などの公共建築に投資し、数々の優秀な建築家や、名門大学への進学者など多くの優秀な人材が輩出され、さらには、有能な人材が街に、同社に集まるようになりました。コロンバスは全米でデザインに優れた都市ベスト6に選ばれ、カミンズ社も全米を代表する企業に成長しました。この事実は、芸術が次世代に与えてくれる創造性を継承することで、豊な人材が育まれ、街の活性化にも結びついたことを証明しています。

蓑豊新館長（館長室にて5月29日）

世界で生きていける子どもたちを育むために、もう一つ必要だと感じるのは、自分の専門分野を極めることです。英語を教えよとよく言われますが、確かに言語も大事ですが、その前に、まず自分の知識をもった上で、言語を道具として使っていく。そういう順番であるべきではないかと思います。例えば、日本の歴史、日本の文化、日本の美術などを勉強してから海外に行くことによって、海外の人から尊敬を得ることができるでしょう。日本人が、海外に行ってもなかなかコミュニケーションがとれないのは、自分の育った日本のことをあまりにも知らな過ぎるからではないでしょうか。

日本には、美術館に行ったことがない、音楽会に行ったことがないという人があまりにも多いようです。美術館というところが、楽しくて、しかも自分の身体の中に感性を植えつけてくれる場所だという意識を持っていただきたい。そのためには、美術館を、素晴らしい作品を並べるだけではなく、訪れる人に楽しんでもらい、もう1回行きたいと思わせる施設にしていかなければならないと思います。

兵庫県立美術館では、具体的には、ホームページの充実など、館からの発信の強化、そして安藤忠雄さんの素晴らしい建築の魅力を更にアピールすること、それから、展覧会に加え、シアターを活用しての音楽会やファッションショーの開催などが挙げられると考えています。地域とのつながりを大事にし、県民の皆様に、美術館を自分の応接間のように利用してもらいたい。美術館を身近に感じていただけるよう、お客様をお迎えする心をスタッフ一同が持つことも大事です。更に、原田の森ギャラリー～灘駅～岩屋駅～美術館までの通りを「ミュージアム通り（仮称）」と名付け、歩いて楽しみながら美術館に来ていただけたらと構想しています。美術館が地元への経済効果を上げ、美術館を中心に文化が創造を育むことにより、街づくりや経済の活性化にも大きく寄与していきたいと思います。

世界的な経済学者のガルブレイスは、これからの日本はGNP（グロス・ナショナル・プロダクト＝国民総生産）ではなく、GNE（グロス・ナショナル・エンジョイメント）を伸ばすべきと提言しています。兵庫県立美術館を、人々の心の拠り所となるような、そんな施設にしていきたいと思っています。誰もが訪れ、ゆっくり寛いだ気分で学び、良い芸術に触れられる、そんな贅沢のできる場所、国際交流の拠点になるような場所、子どもの感性を育み、美の悦びを心から味わえる環境をつくって行きたいと強く願っています。

（みの・ゆたか／当館館長）

1941（昭和16）年生まれ。シカゴ美術館東洋部長、大阪市立美術館長、金沢21世紀美術館長、サザビーズ北米本社副会長などを歴任、2010年4月より現職。